

先端研究拠点事業（拠点形成促進型）事後評価結果

領域・分野	医歯薬学・基礎医学
拠点機関名	徳島大学 ゲノム機能研究センター
研究交流課題名	胸腺器官発生の分子機構
採用期間	平成 16 年 4 月 1 日 ~ 平成 18 年 3 月 31 日
日本側コーディネーター（職・氏名）	教授・高浜 洋介
交流相手国 （国・拠点機関・コーディネーター）	<p>国：スイス 拠点機関：バーゼル大学 コーディネーター：Georg Andreas Hollander</p> <p>国：オランダ 拠点機関：ライデン大学 コーディネーター：Willem van Ewijk</p> <p>国：オーストラリア 拠点機関：モナシュ大学 コーディネーター：Richard L. Boyd</p> <p>国：米国 拠点機関：マイアミ大学 コーディネーター：Howard T. Petrie</p> <p>国：英国 拠点機関：バーミンガム大学 コーディネーター：Graham Anderson</p>

総合的評価

評価

- A** 共同研究・セミナー・研究者交流の3つの交流態様が効果的に構成され、交流相手国機関等との研究交流が順調に実施されたことにより、当初設定された研究交流目標が達成できている。学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成、次年度以降の展望のいずれの観点からも、非常に優れた事業を行ったと判断できる。
- B** いくつかの課題はあるが、交流相手国機関等との研究交流は概ね順調に実施され、当初設定された研究交流目標もほぼ達成できている。学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成、次年度意向の展望のいずれの観点からも、優れた事業を行ったと判断できる。
- C** 予想外の困難な状況が発生したなどの理由により、学術研究、持続的な協力関係の基盤構築、若手研究人材養成等の観点からみて課題が多く残り、当初設定された研究交流目標が達成できているとは言い難い。

コメント

胸腺の発生・分化機構という非常に的が絞られたテーマに対し、極めて適切な相手国拠点機関・コーディネーターが選択され、コーディネーターを始めとした日本側拠点機関である徳島大学の努力により、世界的に現在第一線で活躍しているこれらの研究者を結ぶ研究交流が実施され、具体的成果を得ていることは高く評価に値する。

平成17年度開催のセミナーを他のカンファレンスと相前後して開催するなど、事業は有効かつ効率的に運営されたといえる。

一方、拠点となる研究機関の数及び日本側拠点機関からの参加者数が多く、各参加者がどの程度この事業に貢献したのかということに疑問を感じさせる。また、次年度以降の展望について具体的な研究交流計画の記載がなされていず、詳しい記載がされるべきであったと考える。

1. 事業の実施状況

事業の実施体制、共同研究やセミナーの実施状況、研究者の交流状況、相手国機関と協力状況等の実施状況についての評価。

評価

A 非常に優れている。 **B** 優れている。 **C** 不十分である。

コメント

胸腺という免疫学の謎が残されている組織の発生・分化機構という非常に的が絞られたテーマに対し、極めて適切な相手国拠点機関・コーディネーターが選択されている。国内においても、拠点機関である徳島大学を中心として理化学研究所、京都大学などが連携して事業を推進したと判断される。

実質的に平成 16 年に始まった交流であるため、原著論文としての発表はまだ活発であるとはいえ、また、若手研究者同士の交流がどの程度行われ、各個の研究ターゲットにおいて相互に今後どのような具体的発展が期待されるのかは不明瞭である。

しかしながら、平成 16 年開催のキックオフセミナー、他のカンファレンスと相前後して開催し、その有効性を高めた平成 17 年の国際シンポジウムを通して、国内外の研究者を集めた活発な討論・交流を行っており、周到な準備の下、世界的に第一線で活躍している研究者達との共同研究体制及び定期的な国際会議開催の先鞭をつけたことは高く評価される。

2. これまでの交流を通じての成果

当該研究交流課題を実施したことによる学術的な成果、持続的な協力関係の構築状況、若手研究者の養成への貢献度等、研究交流目標の達成度への評価。

評 価
A 非常に優れている。 <input checked="" type="radio"/> B 優れている。 C 不十分である。
コメント
<p>日本側拠点機関である徳島大学の尽力により、相互に事業への理解度を深める場として国際セミナーが開催され、そこでの活発な討論を通して共同研究が模索されることにより、交流相手機関との安定的な研究交流基盤構築が図られてきた。</p> <p>平成 16 年に始まった事業の学術業績評価を平成 18 年に行うことは時期尚早ではあるが、現段階ではまだ十分な成果があがっているとはいえない。また、研究交流を通じて若手研究人材育成が積極的に行われ、研究交流相手先へ長期派遣されるなどの具体的成果が出ている一方、当該事業が派遣対象者以外の若手研究者にこういった恩恵を与えたのかが良く分からない。</p> <p>本事業により構築された研究交流関係を基に、今後発表されるであろう成果に期待したい。</p>

3. 次年度以降の展望

次年度以降の研究協力体制の維持・発展に向けた展望における計画の適切さ、具体性、実現可能性への評価。

評 価
A 非常に優れている。 B 優れている。 C 不十分である。
コメント
<p>事業運営は適切かつ効率的に行われており、本事業を通して交流相手国との研究交流基盤の構築がなされたと判断される。次年度以降にも更にいくつかの国外研究交流拠点との間で研究協力が推進されるなど、発展的、継続的な活動が期待できると思われる。</p> <p>日本・ヨーロッパ・オーストラリア・アメリカの四極での、定期的国際会議が開催されるようであるが、平成 18 年度以降の定期的国際セミナーの開催予定が具体化していないと思われ、気がかりである。また、展望として国際シンポジウムの開催のみに重点を置かず、具体的研究成果があがるような実質的な協力体制を築くことが望まれる。</p>

4 . 事務運営の適切さ・効率性

経費使用における効率性、実施に際しての計画性等への評価。

評 価
A 適切である。 <input checked="" type="radio"/> B おおむね適切である。 C 不十分である。
コメント
<p>支給経費に比して適正な規模の交流が行われており、経費は効率的に執行された。</p> <p>しかし、交流相手国研究者の招へいに係る経費負担の割合が比較的高く、派遣と招へいのバランスを考え、交流相手国との経費相互負担がなされていると更に効率的であったと思われる。</p>